

弁論術はなぜ技術ではないのか？ —プラトン『ゴルギアス』における弁論術の技術性—

木下昌巳

Masami KINOSHITA

プラトンの著作のなかで、弁論術 (ῥητορικὴ) を直接にテーマとして取り上げ論じているのは、『ゴルギアス』と『パイドロス』の二つの作品である。この二つの作品における弁論術に対する論調の違いは、一読して明らかである。さきに書かれたと考えられる『ゴルギアス』においては、弁論術が論じられる調子は極めて厳しいものであり、弁論術というものは、根本的に否定されているという印象を与える。それに対して、『ゴルギアス』から十数年後に書かれたと考えられる『パイドロス』においては、弁論術に対する論調は『ゴルギアス』に比べてずっと穏やかであり、プラトンは弁論術に対して一定の積極的な役割を認めていると思われる。

この二つの作品の弁論術に対する態度におけるもっとも顕著な違いは、弁論術を技術 (τέχνη) として認めるか否かという点である。『ゴルギアス』では、弁論術は、経験 (ἐμπειρία) の一種であると規定され、その技術性は完全に否定されているように見える。ところが、『パイドロス』においては、弁論術から技術の資格を完全に剥奪するのではなく、技術としての「真の弁論術」というものの成立する道が積極的に探られているのである。この二つの作品におけるこの態度の違いをどのように考えるべきであろうか。この問題に対する解答は、大きく分けて、二つの可能性があると思われる。第一の可能性は、『ゴル

ギアス』において弁論術の技術性が否定されているのは、当時の現実の弁論家の弁論術の理論的未整備に向けられた *ad hominem* な批判であって、弁論術が技術として成立する可能性が否定されているわけではないのであり、『パイドロス』では、『ゴルギアス』における批判を踏まえて、弁論術が真の技術として成り立つためには、どのような条件を満たせばよいのかということが考察されていると考える方法である。このように考えるとき、この二つの著作におけるプラトンの弁論術に対する態度は一貫したものとして解釈することができ、この二つの著作のあいだにプラトンの立場に変化はないと見なすことができるだろう。もう一つの可能性は、プラトンは、『ゴルギアス』においては、弁論術というものが技術として成り立つことを根本的に否定していたのであるが、『パイドロス』においては、何らかの理由で弁論術に対する考えを改め、弁論術が技術として成立する可能性を認めるに至ったと考える方法である。このどちらの解釈が正しいかということを決断するために鍵となる問題は、『ゴルギアス』において弁論術がなぜ技術ではないとされているのかという問題である。本稿の目的は、プラトンは弁論術が技術であることによって、たんに当時の弁論家の理論的未整備を指摘しているのではなく、弁論術全体の存在を否定するようなラディカルな批判をおこなっていることを示すことによって、『ゴルギアス』におけるプラトンの弁論術批判の基本的な立場を明らかにすることである。

弁論術と快樂

プラトンが『ゴルギアス』のなかで弁論術が技術 (τέχνη) であることを否定していることは、周知のことである。しかし、どのような理由で弁論術の技術性が否定されているのかということはかならずしも明らかではない。「技術」という概念の核心は、その理論性にある。弁論術が技術ではないとされていることは、プラトンが弁論術には何らかの理論性が欠けていると見なしていることを示していると思われる。では、その理論性とはどのような種類の理論性なのか？

この対話篇では、ソクラテスの対話相手として、順にゴルギアス、ポロス、カリクレスの三人の人物が登場するが、最初のゴルギアスとの会話においては、ソクラテスは一方的にゴルギアスに問いを投げかけるだけで、ソクラテス自らの立場を明らかにしていない。ゴルギアスが退場し、ソクラテスの対話相手がゴルギアスからポロスに引き継がれたところで、そこではじめてソクラテスは弁論術に対する自らの考えを明らかにする。

ポロス「では、ぼくの質問に答えてもらおうか、ソクラテス。あなたは、ゴルギアスが弁論術について答えに窮したと思っているが、それなら、あなた自身はそれを何であると主張するのかね？」

ソクラテス「弁論術とは、ぼくの主張によれば、いかなる技術なのかという質問かね？」

ポロス「そうだ」

ソクラテス「ぼくには、いかなる技術でもないように思われる、ポロス。ほかならぬきみが相手だから本当のところを打ち明けるとすればね」

ポロス「おや、それなら、あなたは弁論術とは何であると思うのか？」

ソクラテス「最近読ませてもらった書き物のなかで、きみが技術の生みの親だと主張しているその当のものだよ」

ポロス「と言うと？」

ソクラテス「一種の経験 (ἐμπειρία) だ」

ポロス「すると、あなたには、弁論術とは経験であると思えるわけですかね？」

ソクラテス「それがぼくの意見だ。きみのほうで、別に異議がないとしたらね」

ポロス「何についての経験なのですか？」

ソクラテス「ある種のうれしさと快樂をつくりだすことに関する経験だ」
(462b-c)

ここで導入されている「技術」と「経験」という概念の対比のポイントは、何らかの理論性の有無であることは疑いえない。上の会話で、ソクラテスが付け加えて語った「うれしさと快樂をつくりだすことの経験」という規定は、弁論術が技術ではない理由が快樂をつくりだす方法に問題があることを示しているように見える。だとすれば、弁論術に欠けている理論性とは、快樂をつくりだす方法の理論性、言わば「快樂の生理学」とでも呼ぶべきものであると考えられるだろう。のちにソクラテスが弁論術と同じく経験の一種であるとされる料理術に関して語る「熟練と経験に頼って、ただ、普通どのようになるかを記憶にとどめておき、それによって快樂を与えることに成功している」(501a)という言葉は、この解釈を補強すると思われる。この場合、弁論術というものを総合的にどのように評価するかということは別にして、それが快樂をつくりだす方法を理論的に整備することによって、すくなくとも技術という資格は保証

されることになることが予想される。このように考えるとき、ソクラテスは、弁論術が技術であることを原理的に否定しているのではないのであり、ソクラテスの批判は、現状の弁論術の理論的未整備を指摘した *ad hominem* な批判であることになるだろう。

しかし、このあとのソクラテスの言葉を見れば、このような解釈はできないことがわかる。ソクラテスは、四種類の技術とそれらに対応して存在する四種類の偽の技術の関係を示し、そのなかに弁論術を位置づけることによって、自らの主張の意味するところを明らかにしようとする(464b～)。それは、以下のように要約される。魂と肉体には、それぞれを固有の対象として扱う二つの技術が存在する。その一方の魂を扱う技術は政治術であり、政治術はさらにそのなかで立法術と司法術に分かれる。もう一方の肉体を扱う技術のほうは、それを総称的に呼ぶ呼称は存在しないが、この技術も政治術の場合と同様に、そのなかで体育術と医術という二つの技術に分かれる。そして、この四種類の技術には、平行するかたちで、そのそれぞれに「へつらい(κολακεία)」と呼ばれるべき偽の技術が存在している。魂を対象とする立法術と司法術にはソフィストの技術と弁論術が、肉体を対象とする体育術と医術には化粧術と料理術が、それぞれに対応するかたちで偽の技術として存在しているのである。真正の技術とされる二組の技術は、「一方の組は肉体を、他方の組は魂を、それぞれ最善の状態に置くことをつねに目標にしながら、その世話をすることを仕事にしている」(464c)のに対し、「へつらい」のほうは、「何が最善かということにすこしも意を用いず、ただ、そのときそのときにできるだけ快い思いをさせることによって、無知な連中の心をつかみ、彼らを欺いて、いかにも大したものであるかのように思わせる」(464d)のものなのである。

ここで重要なことは、このソクラテスの説明によれば、偽の技術とされる弁論術や料理術は、そのカテゴリーとして技術性が否定されているということである。弁論術や料理術は快楽を目指すものであるとされているが、もしこれらのものが快楽をつくりだす方法をいくら精密化しても、司法術や医術になるとは考えられない。そして、この説明における司法術と弁論術、医術と料理術の対比のポイントは、まさに、技術であるか否かという点にある。このことは、技術の核心が快楽との関係以外にあることを示している。この点は、問題の焦点である弁論術の技術性ということを考えるために、とくに留意しておくべきことがらである。「弁論術は技術ではなく経験である」という規定は、現実の弁論家は何の理論的裏付けもなしに、ただ「経験則」によってのみ説得をおこなっているという印象を与える。このような捉え方は、われわれは弁論術とい

うものに対してなじみがないゆえに容易に受け入れられやすいと思われる。しかし、料理術がいくらその快楽に関する理論性を精密化しても、医術にならないように、弁論術もそれが快楽を目指すものであるかぎり、真の技術である司法術にはならないはずである。つまり、弁論術や料理術は、技術であることが原理的に否定されていると考えなければならない。

このソクラテスの説明に対して、ある論者は、次のような疑問を投げかけている。弁論術や料理術が快楽を目指すものであることが事実であるとしても、それらは快楽の技術として成立しうるのではないだろうか¹⁾？この疑問は、弁論術よりも経験の一種であるとされる料理術のことを考えれば、より明確になるだろう。料理術がもっぱら快楽を目指すものであるということを認めるとしても、料理術は「快楽の技術」として成り立つ、あるいはすでに成り立っているのではないだろうか²⁾？Doddsはこの疑問に対して次のように答えようとしている。彼は、このソクラテスの主張の背後には、快楽というものはその性質として客観的に計量不可能なものであり、対象に対する理論的な処理を必須とする技術の対象としてはなじまないという考えがあることを想定する³⁾。もしソクラテスがこのように考えているのであれば、必然的に、快楽を目指す料理術と弁論術は技術として成立しないことになり、ポロスに対して語られた説明と整合的に解釈することができるだろう。しかし、この説明を受け入れることはできない。この後でソクラテスは、快楽に技術が関与しうることを積極的に認めているからである。後半のカリクレスとの会話のなかで、彼は次のように述べて

¹⁾Irwin, 130: "Socrates also claims that rhetoric is concerned with the production of pleasure, and makes this a sufficient condition for being a knack. But is it? Perhaps (a) rhetoric is a knack, not a craft, and (b) it is concerned with pleasure, not with good. Both (a) and (b) may give good reasons for distrusting rhetoric. But how does (b) support (a)?" Roochnik, 85: "Socrates seems to assume here that *because* rhetoric aims for the pleasant than the good, it cannot be a techne. He seems to assume that there can be no techne of cooking of aiming for pleasure. But why?" (イタリックは、Roochnik自身による。)

²⁾Irwin, 210: "Why can pleasure-producing knacks give no account? Might a pastry-cook or a fashion designer not be able to say what reliably pleases his customers and how he produces it?"

³⁾Dodds, 10: "it (rhetoric) relied solely on an appeal to men's irrational desires and there can be no true science of the irrational.", 229: "in Plato's view τὸ βέλτιστον is in each case rationally determinable, whereas τὸ ἡδύ is not." Gosling も、『ピレボス』に対する注釈のなかで、技術と快楽の関係について同じ主旨のことを述べている: "They (empeiriai like rhetoric) fail to be technai because no general account can be (or at least is) given of what pleases people, and so there are no general canons for ensuring success." (153).

いる。

ソクラテス「では、いったい、いろいろの快いことがらのなかから、どのようなのが善いことであり、どのようなのが悪いことであるかを選び別けるということは、誰にでもできるようなことだろうか？それとも、それができるのは、それぞれの場合に技術を身につけた者だろうか？」

ゴルギアス「技術を身につけた者 (τεχνικοῦ) である」 (500a)

快楽を扱うのに技術が必要であるということを認めた返答はゴルギアスによるものであるけれども、それはソクラテスが望んでゴルギアスに認めさせたものであることは疑いえない。ここで言われている善い快楽と悪い快楽とが具体的にどのような快楽を指すのであれ、快楽は技術による扱いを拒むものではなく、快楽を適切な仕方で扱うには、むしろ積極的に技術の関与が必要であるとされているのである。だとすれば、Doddsのような仕方で、快楽は技術的扱いの対象とはならないと考えることはできないことになるだろう。

Doddsの解釈は、弁論術や料理術が技術ではない理由を、やはり快楽に対する理論性に求めるものである。わたしは、技術であるために必要とされているのは、快楽に関する理論性以外の理論性であり、快楽の技術というものが成り立たないのかという疑問は、技術の概念を捉えそこなったことに起因するものであると考える。まず、ソクラテスが「快楽の技術」、あるいはそれに類する表現はどこでも使っていないことに注意しなければならない。弁論術が「快楽をつくりだす経験」と規定されていたことは事実である。しかし、さきに引用したこの規定が述べられる個所 (462b-c) において、ソクラテスが「喜びと快楽を作りだすことの経験」と対比させているのは、たんなる「技術」であって、「快楽の技術」ではない。このことは、弁論術の技術性という問題を快楽との関係によって考える必要がないことを示している。

そして、その理論性の内容がもっとも明確に語られているのは、料理術について語られた以下の言葉である。

「ほかでもない、それ (料理術) は最善のものをさしおいて、ただ快いものだけを狙うからだ。そして、ぼくはこの料理術のようなものを技術として認めずに、たんなる経験にしかすぎないと主張する。なぜなら、いかなる理論 (λόγος) にもとづいてその対象に対してもたらしめていることがらをもたらしめるのかを説明できず、それらがどのような本質的性格をもつのかというこ

とについて、なにひとつ理論的説明を与えることができない。したがって、それぞれのことがらの原因を言うことができないからだ (οὐκ ἔχει λόγον οὐδένα ᾧ προσφέρει ἃ προσφέρει ὅποι' ἅττα την φύσιν ἐστίν, ὥστε τὴν αἰτίαν ἐκάστου μὴ ἔχειν εἰπεῖν)。ぼくとしては、いかなるものにせよ、理論的説明のないものに対して技術の名を与えるわけにはいかない」(465a)⁴⁾

ここで言われていることは、料理術には、それがその対象(肉体)に対して「もたらすもの(ἃ προσφέρει)」に対する理論的説明を欠いているのであり、それゆえに料理術は技術でないということである。理論的説明が欠けているとされるのは、「料理術がもたらすもの」に関してであり、この「料理術がもたらすもの」が具体的に何を指すかということはオープンな状態にされていることに注意しなければならない。やはりここでも、ソクラテスは、料理術は快楽を目指すとは言っているけれども、「料理術がもたらすもの」=快楽という仕方では提示していないのである。わたしは、ここでソクラテスが述べていることは、技術であるならば、対象に対する善悪という観点から、さまざまなものを準備し、対象にもたらさなければならないのであるはずなのに、料理術は肉体に対してどのようなものを与えればよいのかということをもまったく顧慮しないということであると考ええる。このあとで、ソクラテスがこの箇所を振り返って語っている言葉は、この解釈を裏付けている。

「もしきみが憶えているならば、ぼくは次のように述べたのであった。すなわち、人々のためにものごとを用意し整えてくれる仕事にはいろいろなもの

⁴⁾この箇所は、写本のままでは読みにくく、論者たちを悩ませてきた箇所である。本文中の訳は写本をそのまま読んで、ᾧをλόγονを先行詞とする手段の与格として訳出した。しかし、ᾧ προσφέρει ἃ προσφέρειの部分がこのままでは読みにくいことは事実なので、以下のような読み方が提案されている。

① ὧν προσφέρει : Cornarius, Heindorf, Bekker, Hermann, Thompson, Lodge, Nestle, Lamb

② [ᾧ προσφέρει] ἃ προσφέρει : Ast, Stallbaum

③ ᾧ προσφέρει <ῆ> ἃ προσφέρει : Dodds (藤澤訳はDoddsに従うとしながら、訳文を見るかぎりでは①あるいは②の読み方を採っているように見える。)

もし①あるいは②のように読めば、料理術には、それが対象にもたらすものに対する理論的理解が欠けているということだけが言われていることになり、③のように読めば、料理術には、その対象そのものと対象にもたらすもの両方に対する理論的理解が欠けていることになるだろう。③のように読めば、わたしの解釈にもっとも合致する意味をもつが、①あるいは②のように読んでも、わたしの解釈の妨げになることにはならない。

があるが、そのうちのある種のものは、それがもたらすものは快樂までであり、まさにこの快樂だけをもたらししてくれるけれども、より善いことや悪いことについては、何も知らないのである。他方、これに対して、もう一方の種類のもは、何が善いことであり、何が悪いことであるかを、知っているである。そして、ぼくは快樂を目標とするほうの仕事に属するものとしては、料理法という技術ではない経験を挙げ、他方、善を目標とするほうの仕事に属するものとしては、医術を挙げたのであった」(500b)

ここで言われている料理術と医術の対比のポイントが対象に対する善悪という視点の有無にあることは疑えない。経験が顧慮することは快樂の範囲にとどまるのであり、対象に対する善悪ということにまで思慮が至らないのに対して、技術のほうは、対象にとって善いものと悪いものを正確に知り分け、対象にとって善いものを整えもたらすのである。この言葉のなかで、料理術が考えることは「快樂まで」(μέχρι ἡδονῆς)にとどまると言われていることに注意する必要がある。このことは、経験と呼ばれるべきものにも、ある種の理論性が備わっていることを示唆している。つまり、この二つの働きの違いは、単純な理論性の有無ではなく、その対象に関して勘考することがらの射程の違いである。医術と料理術の組み合わせを例にとれば、料理術は身体がどのような状態であるべきかという知識が欠けているので、身体がその場その場で求める快樂を与えることにしか意を払わない。それに対して、医術は身体の善い状態を正確に理解したうえで、その知識にもとづいて身体に善き状態をもたらしことを図るのである。このように考えるとき、技術が善を目指すという主張の意味は、その対象の本性の知識にもとづいて、それを善い状態にしたり、善い状態を保全したりするということであることになるだろう。このことは、ソクラテスにとって、技術と善という概念は切り離すことができない概念であることを意味する。弁論術は技術ではないという主張と弁論術が善ではなく快樂だけを目指すという主張は、独立した二つの論点ではなく、同じ一つの論点であると考えなければならない。

もし、技術が以上のようなものであるならば、弁論術が技術であるためにはどのような条件を満たさなければならないことになるのか？ 弁論術は司法術に対応する偽の技術であり、司法術は魂を対象とする技術であるとされていた。魂をその対象とする技術は、それが技術であるかぎりにおいて、魂に善い状態をもたらしことを配慮することを働きとするはずである。つまり、弁論術が技術であろうとするならば、医術が肉体に対する配慮をするのと同じ仕方で、魂

に対する配慮をなす働きをもたなければならないのである。次のソクラテスの言葉は、弁論術に対するこのような見方を完全に裏付けている。

「それでは、さきに言われたような弁論家、すなわち、技術をそなえたすぐれた弁論家 (τεχνικός τε καὶ ἀγαθός) が人々の魂に向かって働きかける言行のすべては、まさにこれらのことがら (正義と節制) に目を向けながらおこなわれるのではないだろうか？そして、なにか贈り物をするときには贈り物をしたり、奪いさるときには奪いさったりしながらも、その心に向けるところは、つねにただ一つ、何とかして同国民の魂のなかに正義が生まれて不正が除かれるように、節制が生じて放埒が除かれるように、一般に徳が植えつけられて悪徳が去るように、ということではないだろうか？」 (504d-e)

ある論者は、ここでソクラテスが弁論術が真の技術として成り立つことを認めているように見えることは、さきにソクラテスが弁論術が技術であることを否定したことと矛盾すると指摘している⁵⁾。さらにまた、ある論者は、この発言はソクラテスが弁論術が技術として成立する可能性を認めたものであり、『パイドロス』で展開されることになる説得の技術としての弁論術の構想が予告を読み取ろうとする⁶⁾。しかし、このソクラテスの言葉の意図は、弁論術が技術ではないという主張を撤回することにあるのではなく、弁論術が真の技術であるためには、どのような条件を満たさなければならないのかということを主張することであると思われる。この言葉は、さきに引用した料理術の技術性を否定するためにポロスに対して語られた二つの言葉 (465a, 500b) と完全に平行なものであることに注意しなければならない。そこでは、料理術が技術でない理由として、料理術がその対象である肉体に対して善をもたらさないということが言われていた。これらの言葉を読み比べるとき、弁論術が技術であるために要求されていることは、料理術の場合とまったく同じであることがわかる。つまり、弁論術が技術であるためには、その対象である魂に対して善をもたらさ

⁵⁾ Cf. Dodds, 330.

⁶⁾ Kennedy, 16: "Although Plato denied that rhetoric as it existed was an art, he was, even in the *Gorgias*, prepared to admit the possibility of a true rhetoric, that is, of one which demonstrates absolute truth by means of true principles. This possibility he developed years later in the *Plaedrus*, ---"; Rowe, 196: "The *Gorgias* too recognizes the possibility of a reformed rhetoric, united with philosophy."

なければならないのである。そして、ポロスに対して語られた諸技術の關係の観点からすれば、もし弁論術がここで言われている条件を満たしたときには、それは、魂の善を目指すとされる司法術と區別できないものとなるだろう。つまり、それは、もうすでに弁論術ではなく、司法術の地位を獲得しているのである。

正義の技術としての弁論術

『ゴルギアス』における弁論術論を考えるさいに見落としてはならないのは、弁論術の対象であるとされる魂と正義という概念の關係である。ソクラテスにとって、正義という概念の意味は、「魂の善さ」にほかならないことに注意しなければならない。ソクラテスは、上に引用した言葉の直前で、正義とは、肉体の健康に相当するものであり、魂のなかに秩序が成立している状態のことであると明確に定義している（503c-d）。正義を個々の行為からではなく、魂の状態として捉える立場は、ソクラテスの一貫した立場である。さきに引用した言葉のなかで言われている「何とかして同国民の魂のなかに正義が生まれて不正が除かれるように」することとは、国民の魂をできるだけ善い状態にすることによってほかならない。弁論術が技術であるために求められていることが、魂に善い状態をもたらすことであるとするならば、弁論術は「正義の技術」としての機能が期待されていることになる。しかし、ソクラテスの目から見れば、実際には、弁論術は、正義、すなわち魂の善さということをもまったく顧慮せず、ただ魂に快樂を与えることだけを考えているものなのである。わたしは、この正義の技術という観点こそ、ソクラテスが弁論術の技術性を否定した理由の核心であると考ええる。

この視点から『ゴルギアス』の議論全体を見ると、弁論術の技術性という問題は、一貫して「正義の技術」としての技術性が問題にされていることを見て取ることができる。ポロスに対して語られる、四つの技術とそれに対応する四つの偽の技術のなかに弁論術を位置づける説明（464b～）にもう一度目を向けることにしよう。そのなかで、弁論術は、司法術（δικαιοσύνη）に対応して存在する偽の技術として規定されていた。なぜ弁論術は司法術に対応する偽の技術とされるのだろうか？ ここでソクラテスが弁論術を偽の司法術としていることには、重要な意味があるのであり、この点は今まで見逃されてきたと思われる。

そもそも弁論術に対応する真正の技術であるとされるδικαιοσύνηとはどのような

な技術であるのか。従来、ここでこの語は「司法術」と訳されてきた（本稿においても、これまでの議論では、それに従った）。歴史的に見れば、弁論術は、相手を説得することを目的とした法廷における論争技術として発達したものであり、ソクラテスが弁論術のこのような使用法に批判的であったことは疑いえない。その意味で弁論術を偽の司法術と呼んだと考えられるかもしれない。しかし、ここで次のような疑問が生じる。δικαιοσύνηという語は、制度としての司法術を意味しうるとしても、まず第一に、正義という概念そのものを意味する語である。一方、ギリシャ語で裁判制度としての司法術を表す語としては、δικαστικήという語が一般的な語として存在する。プラトンも「司法術」という意味を要求するときには、ふつうこの語を用いている⁷⁾。もしここでソクラテスが法廷の説得技術としての弁論術のあり方を念頭において語っているだけなら、δικαιοσύνηよりも明確に法廷技術を指すδικαστικήという語を用いるほうが、批判の意図がよりはっきりすると思われる。それにもかかわらず、ここでの議論では、ソクラテスは一貫してδικαστικήではなくδικαιοσύνηという語を使っている（464b8, c2, 465a3）。これはなぜだろうか？

Doddsは、ここでδικαιοσύνηという語が用いられている理由を、δικαστικήという表現はプラトンが否定的であった当時のアテナイの法廷を想起させる言葉であるがゆえに、この表現を使うことを避けたのかもしれないと推測している⁸⁾。しかし、この説明には説得力がない。このあとのカリクレスとの議論のなかで、まさにこの箇所に戻って言及されるときには、司法術を指す語としてδικαιοσύνηがδικαστικήと言い換えられて用いられている（520b）。また、注で指摘したプラトンのほかの著作の用例を見ても、δικαστικήという語がかならずしも否定的な含意をもって用いられているわけではないと思われる。

ここでプラトンがわざわざδικαιοσύνηという語を使ったのには、Doddsが推定した理由とは別の重要な理由があると思われる。そもそもδικαιοσύνηという語は、正義という概念そのものを意味する語である。それが技術名として用いられるとき、文字通り「正義の技術」を意味するだろう。ポロスとの会話に先立つゴルギアスとの会話において、ソクラテスは「弁論術とは何に関する技術か」と問うて、弁論術は正義（δικαιοσύνη）と不正に関する説得の技術であるという返答を引き出していたことを思い起こす必要がある（454b）。ゴルギアスはソクラテスによって矛盾に追い込まれたが、その議論のなかで「弁論術は正義と不

⁷⁾ Cf. *Rp.* 409e, 410a; *Polit.* 303e.

⁸⁾ Dodds, 227-228.

正に関する技術である」という規定自体は結局、肯定も否定もされないままに終わっていたことに注意しなければならない。『ゴルギアス』をギリシャ語で読むならば、ここでソクラテスの「弁論術は偽のδικαιοσύνηである」という主張を目の当たりにするとき、ゴルギアスの「弁論術は正義と不正に関する説得の技術である」という主張との連関を考えないではいられないだろう。ソクラテスは、ここであらためて、弁論術は偽の正義の技術（δικαιοσύνη）であると宣言することによって、弁論術に関するゴルギアスの規定を正面から否定しようとしていると考えられる。このゴルギアスによる規定とソクラテスの規定の対比は、翻訳で読まれるときはとくに見失われがちである。

わたしは、この箇所のδικαστικήという語を「司法術」と訳すことが誤りであると言っているわけではない。δικαιοσύνηが立法術（νομοθετική）とパラレルな関係にあるものとして提示されていることから見て、ここでこの語が「司法術」という意味を担っていることは否定できない。しかし、その場合においても、その内容が法廷における論争技術や手続きのことであると考えする必要はない。そもそも、法廷とは何よりもことからの正義・不正義が論じられられ、明らかにされる場所であるはずである。その意味において、本来の司法術とは、法廷における論争術や手続きの技術ではなく、ものごとの正・不正を決定する正義の技術でなければならないだろう。ここで念頭におかれているのは、法廷のテクニックとしての司法術ではなく、本来の意味での司法術、すなわち正義の技術としての司法術であると考えられる⁹⁾。この議論でのソクラテスの意図は、弁論術を偽の司法術、すなわち偽の正義の技術であるということによって、弁論術から正義の技術の地位を剥奪することにあると考えられる。

説得の技術としての弁論術の地位

以上の考察が正しいならば、ソクラテスは、弁論術を偽の正義（魂の善さ）の技術として位置づけていることになり、『ゴルギアス』における彼の弁論術批判の眼目は、「正義の技術」という一個の個別技術としての地位を否定することにあると考えられる。しかし、このような捉え方は、弁論術を本来あるべ

⁹⁾このような、一般に制度を指す言葉をその本来の意味に引き戻して使う用法は、『ゴルギアス』のほかの箇所でも見られる。この後でソクラテスは、世間で政治家と呼ばれている人々は真の政治家がおこなうべき仕事をなしていないのであり、国民の魂への配慮というの真の政治術を身につけているのはソクラテス自身だけであると主張している（503b-c, 521d-e）。ここに見られるのは、政治術の意味をその根本の意義において捉え直そうとするソクラテスの態度である。

き場所に置いて考察していないように思われ、弁論術を不当な仕方扱っているという印象を与える。ソクラテスとゴルギアスのあいだで確認されているように、弁論術とは人を説得するための技術であるはずである(453a)。しかし、説得という行為は、伝えたいことを他人に伝える行為であり、それ以前の個々の知識を獲得することとは無関係であると思われる。もしそうであるならば、弁論術はすでに獲得された知識を他者に伝える行為にのみ関わる技術として存在するのであり、正義の知識という個別な知識を獲得することとは別な領域に属することではないだろうか？説得という行為は、人間が共に生きていくために必要不可欠な行為であり、この説得という行為を有効におこなうために、説得の方法を技術として整備することには十分に価値があるのであると思われる。そのような「説得の技術」があるとするならば、それは弁論術にほかならないのではないだろうか？『パイドロス』においては、弁論術に対するこのような位置づけが、弁論術自身の言い分として、擬人化された弁論術の言葉として語られている。

「あきれた人たちだね、何をいったい、くだらぬことをおしゃべりしているのだ。真実を知らずして話し方を、学べなどと、私は誰にも命じていないではないか。私が命じているのはこういうことなのだ。つまり、私の忠告することに何らかの価値があるとすれば、まず真実をわがものにしたうえで、この私、つまり言論の技術を把握しなければならないということなのだ。しかし、これだけは自慢してもいいが、もし私の助けがなければ、ものごとが真実どうであるかを知っている者といえども、技術にかなった仕方説得することとは、けっしてできないであろう」(Phdr. 260d)

しかし、『ゴルギアス』においては、弁論術を、知識がすでにあることを前提としたうえでの純粹に説得のための技術として捉えようとする立場は、まったく無視されているように見える。弁論家には、そもそも知識が欠けているのであり、弁論術は、ただ知識があるように見せかける方法であるとされている(459b-c)。これはなぜだろうか？わたしは、この問題に対する解答は、ゴルギアスとソクラテスの問答のなかに求めることができると考える。ソクラテスとゴルギアスのあいだで、弁論術は何に関する説得をおこなうのかという質問の意味を明らかにするために、次のような問答がおこなわれる。

ソクラテス「数論は、そして、数論の術を心得ている人は、数に関すること

をわれわれにいろいろと教えるのではありませんか」

ゴルギアス「たしかに」

ソクラテス「したがって説得もするわけですね」

ゴルギアス「そう」

ソクラテス「するとまた、数論もまた説得を作りだす技術だということになりますね」

ゴルギアス「そういうことになるようだ」

ソクラテス「そこでもし、ある人がわたしたちに、その説得とはどのような説得で、何に関する説得であるかとたずねたとしたら、わたしたちはおそらく、その人に向かって、偶数と奇数の全系列に関しての知識を教えるような説得であると、こう答えるでしょう。そのほか同様にして、わたしたちは、さっき話に出た技術の全部について、それらの説得とはいかなる説得であり、その説得とはいかなる説得であるのかということを、示すことができるでしょう。そうではありませんか」

ゴルギアス「そう」(453e-454a)

ここで、ソクラテスは、個別技術の対象領域に関わることがらについての説得は、その個別技術自身が説得によっておこなわれるという立場を明らかにしている。数論に関することがらの説得は、数論自身によっておこなわれるのであり、医術に関することがらの説得は、医術自身によっておこなわれることになる。このことは、ソクラテスは、あることがらに関して知識をもつことと、そのことがらに関して説得する能力を持つこととは、分けることのできないことであると考えていることを示している。だとすれば、正義に関することがらについての説得も、必然的に正義に関する知識そのものによっておこなわれることになるだろう。つまり、正義の知識の所有者は、その正義の知識によって、正義に関することがらに対する説得の能力を持つようになるのである。そして、各分野に関する説得はそれぞれがその分野を対象とする個別知識によっておこなわれることになり、個別の知識から独立した、純粹に説得の技術というものが成立する余地は存在しえないことになる。もし個別ソクラテスが個別技術が説得の機能も含むという立場に立っているのであるならば、彼が説得の技術としての弁論術を認めないということは、必然の帰結なのである。

しかし、以上のようなソクラテスの立場に対して、正義に関する説得と技術的知識に関するような説得を、同列に考えてよいのかという疑問が生じる。そもそも、われわれは、「説得」という語を、あらゆる領域のことがらについて

用いるわけではない。日常的な用法では、ある分野の専門家がその専門的知識を他者に伝える場合などは、その行為を説得とは呼ばない。「説得」という表現は、何ごとかに対する他者の価値的評価を変更させ、それにもとづいて選択される行為を変化させようとする場合に用いられる。つまり、われわれの通念では、「説得」という概念は、ある特定の領域、すなわち価値的領域と切り離せない関係をもつ概念なのである。このことは、たんに用語法の問題にとどまることがらではなく、ソクラテスの弁論術批判の背後に存在するより大きな問題と関わりをもっている。われわれが価値的なことがらに関してのみ「説得」という語を用いる背景には、価値的領域と技術的知識のあいだに本質的な違いがあることを前提としている。専門的知識の場合には、門外漢が専門家に対して異を唱えることは、知識対無知という構図のもとに、たんに愚かな行為として片付けられるだろう。しかし、価値的なことがらについての判断に関しては、その当否は技術的知識と同じ仕方で定められるものではなく、その最終的判断の是非は個々人に委せられる「主観的領域」に属することがらであるとするのが一般的な立場である。この判断には、「客観的基準」が存在せず、ある判断が別の判断よりも勝っているとする理由を示しにくいゆえに、容易に変化させやすいものである。そして、ゴルギアスら弁論家の弁論術がもっとも効果を発揮したのは、まさにこのような領域であると思われる。彼らは、人々の価値的判断の揺らぎやすさにつけこんで、あらゆるテクニックを駆使して、人々の判断を操ろうとしたとすることができる。しかし、ソクラテスは、一般の人々が持つこのような想定を共有することはなかった。価値的判断が相対的なものであり、その是非は個々人の主観的判断に委ねられるとするような立場は、ソクラテスの立場からはもっとも遠いものである¹⁰⁾。(このような立場を反駁する

¹⁰⁾Cf. 朴、2-3. 朴氏は、「そのような説得（専門家が専門的知識を伝える説得）は、説得であるよりもむしろ「教示する」ことに近く、人に決断を促すたぐいのものではない」として、「本来の説得」の領域は価値的な領域に属することがらであると結論している。しかし、この「本来の説得」という言い方はミスリーディングであり、ソクラテスが「本来の説得」とそうでない説得を区別する立場を共有しているとするのなら、それは誤りである。なぜなら、この表現は、「教示する」という行為と「説得する」という行為が異質なものであることを暗黙に認めることを要求し、「説得はいかにしておこなわれるべきか」、「説得をその機能とする弁論術はどのように評価されるべきか」という問いは、この異質性を前提にして考察されなければならないことになるからである。一般にわれわれは「説得」という語を行為の選択など相手の価値的な判断の変更を強いる場合に用いることは事実である。しかし、このことは、本文で述べたように、われわれの通念にもとづいた用語法の問題にすぎない。朴氏の指摘するテキスト上の根拠は、専門家が専門的知識を伝える場合について、「教える」という表現が用いられていることである（455a1, 458e7）。しかし、この箇所の議論の主旨は、弁論術による説得は知識を与える説得では

ことこそ、『ゴルギアス』という作品の主題であると考えられる)。ソクラテスによれば、正義に関することがらも技術的な知識と同じくその正誤を決定できるのであり、その判断が定まらないのは、ただその知識をもたないことに起因している。このような考えにもとづいて、ソクラテスは、正義などの価値的なことがらに関する説得と、技術的なことがらに関する説得は、本来、同質なものであるべきであり、その同質性が回復されなければならないと考えたのである。

(京都大学文学部 研修員)

文献表

Dodds, E.R., *Plato Gorgias* (Oxford, 1959)

Irwin, T., *Plato Gorgias* (Oxford, 1979)

Kennedy, G. A., (1), *The Art of Persuasion in Greece* (Princeton, 1963)

Roochnik, D., "Socrates' Rhetorical Attack on Rhetoric", in F.J. Gonzalez ed., in *The Third Way: New directions in Platonic Studies* (Maryland, 1995) 81-94.

Rowe, C. J., *Plato: Phaedrus with translation and commentary* (Wiltshire 1986)

朴一功「弁論術・説得・対話」(1998の西洋古典学会シンポジウムにおける発表。改定稿は『西洋古典学研究』(1999)に掲載予定。本稿の参照ページはシンポジウム用のハンドアウトによる。)

本文中の『ゴルギアス』の翻訳は、田中美知太郎、『プラトン 世界の名著 6』(中央公論社, 1978)所収の藤澤令夫先生による翻訳を、若干、手を加えて使用させていただいた。

なく、ドクサを与える説得であるということを主張することであり、この二種類の説得の区別は、その対象領域に依存してゐるのではない。ソクラテスは、正義に関する説得が知識を与える説得とはなりえないとも言っていないし、個別技術に関する説得がドクサを与える説得になりえないとも言っていないのである。ソクラテスの主張の眼目は、説得における専門的知識の領域と価値的な領域の異質性ではなく、逆に、その同質性である。